

# 敬語用法の原理的理解を促進する敬語学習支援システム

## Learning Support System for Promoting Theoretical Understanding of Honorific Usage

岸本 雄<sup>\*1</sup>, 林 佑樹<sup>\*2</sup>, 瀬田 和久<sup>\*2</sup>

Yuu KISHIMOTO<sup>\*1</sup>, Yuki HAYASHI<sup>\*2</sup>, Kazuhisa SETA<sup>\*2</sup>

<sup>\*1</sup>大阪府立大学 現代システム科学域

<sup>\*1</sup>College of Sustainable System Sciences, Osaka Prefecture University

<sup>\*2</sup>大阪府立大学大学院 人間社会システム科学研究科

<sup>\*2</sup> Graduate School of Humanities and Sustainable System Sciences, Osaka Prefecture University

Email: y\_kishimoto@ksm.kis.osakafu-u.ac.jp

あらまし：日常生活において敬語表現を適切に用いることは円滑なコミュニケーションのために重要である。敬語を適切に使用するためには、まず会話に登場する人物の関係性を把握し、それに伴った敬語の語法に基づく語彙変換が必要となる一方で、それらを日常会話から原理的に理解することは容易でない。そこで本研究では、人物の関係性の可視化と適応的なフィードバックにより、適切な敬語理解を促進する敬語学習支援システムを提案する。

キーワード：敬語表現，原理的理解，敬語原理モデル，系統的な学習

### 1. はじめに

自らの意思や感情を言葉で人に伝える際に、その内容を単に表現するのではなく、相手や周囲の人と、自らとの人間関係・社会関係についての気持ちの在り方を表現する役割が敬語にはある<sup>(1)</sup>。敬語の適切な使用は、人と人とのコミュニケーションを円滑にし、良好な人間関係を築いていくために重要な役割を担っている。

一方で、日常会話で敬語を適切に用いることは誰しもができることではない。特に、会話における登場人物の関係性や敬語の語法に関する理解が乏しければ、何がどのように誤っているのかを原理的に理解することが難しい。

そこで本研究では、会話状況における人物の関係性を可視化し、適応的なフィードバックを学習者に提示することで、敬語の原理的理解を促す敬語学習支援システムを提案する。

### 2. 敬語の原理的理解を促す学習活動

萩野は、会話における状況を表現するために、話し手と聞き手からなる「伝達」と、伝達内容に登場する為手と受け手からなる「話題」を区分した「敬語のしくみ図<sup>(2)</sup>」を提案している。本研究では、敬語の原理的理解を促進するための参照モデルとして敬語のしくみ図（以降、敬語原理モデル）を用いることとする。

図1に、姪である私（話し手）が伯父（聞き手）に、「私（為手）が亡くなった伯母さま（受け手）にお花を差し上げたのは去年の今日でございました」と伝える状況を敬語原理モデルにより表している。丁寧語は必ず「伝達」の領域に現れ、謙譲語は、必ず「話題」の領域に、尊敬語は「伝達」と「話題」の間に現れることを表現している。

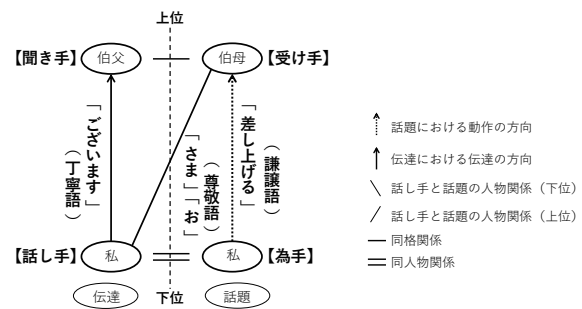


図1 敬語原理モデル（敬語のしくみ図<sup>(2)</sup>）

本研究では、敬語の系統的な学習の手立てとしてこの敬語原理モデルに即した学習活動をデザインし、立場（役職）の異なる話し手と聞き手の会話における敬語の原理的な理解の促進を目指す。

#### 2.1 伝達・話題を意識した人物の関係性の把握課題

敬語を適切に使用するためには、まず会話に登場する人物の関係性を伝達と話題に区分して把握する必要がある。ここでは、伝達場面における話し手と聞き手の上下関係に加えて、伝達内容（話題）に登場する為手と受け手の上下関係も適切に捉えることが重要となる。

本研究では、伝達場面と伝達内容の人物の関係性を表現する敬語原理モデルの構築課題を学習者に与えるとともに、誤りに対する適応的なフィードバックを与えることにより、人物の関係性の適切な把握を促すことを考える。

#### 2.2 敬語種類の峻別課題

他者との会話において、話し手はまず会話内の登場人物の関係性に基づく敬語使用を判断した上で、

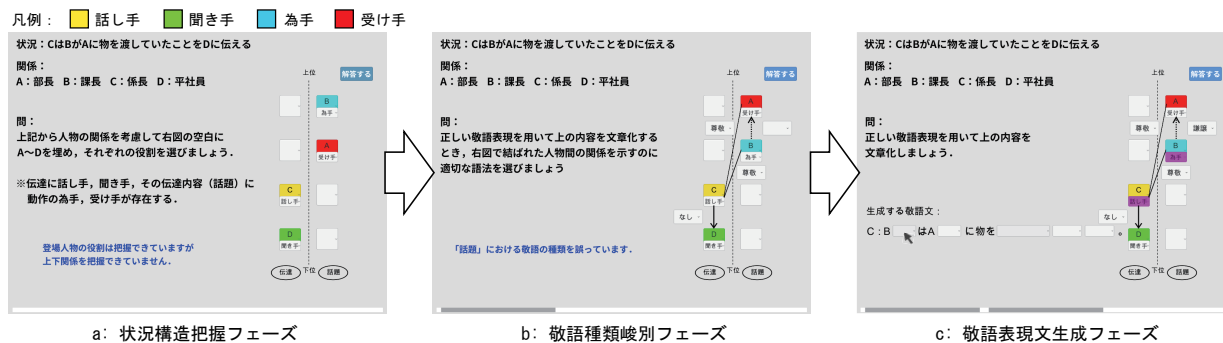


図2 敬語学習支援システム

用いる敬語の種類を峻別する必要がある。適切な敬語種類を判断するためには、各敬語の機能を正しく理解できていることが前提となる。

本研究では、2.1節で学習者が構築したモデル上において敬語種類の峻別課題を与え、誤りに対するフィードバックにより再考の機会を与える。

### 2.3 敬語表現への語彙変換課題

敬語を伴う具体的な文章を生成する状況においては、敬語対象語彙に適切な敬語を割り当てる必要がある。語法に関する知識を習得できていたとしても、文章中の様々な言葉を敬語種類に基づき適切に変換しなければならない点で混乱を起しかねない。

そこで本研究では、敬語の変換対象となる言葉がどの人物からどの人物への敬意なのかを、敬語原理モデルに視覚的に明示し、会話内における人物の関係性と対応付けることで、語彙変換に関する理解を促す。

## 3. 敬語学習支援システム

2章のアプローチに基づき開発した敬語学習支援システムを図2に示す。本システムはUnityを用いて実装され、事前学習画面および演習画面から構成されている。事前学習画面では敬語原理モデルについて学ぶことができる。演習画面は、(1)状況構造把握フェーズ、(2)敬語種類峻別フェーズ、(3)敬語表現文生成フェーズから構成されている。学習者は、ある会社内で役職が異なる2人の会話シーンを題材に、各フェーズ課題を通じて敬語の原理を段階的に学ぶことができる。

### 3.1 状況構造把握フェーズ

与えられた状況から敬語原理モデルを構築する課題に取り組むフェーズである(図2a)。

正しい敬語原理モデルを構築する活動において学習者には、登場人物の上下関係と役割(伝達における話し手と聞き手、話題における為手と受け手)を考慮させる。学習者の誤った入力に対しては、把握状況を提示することで、人物の上下関係と役割の観点から学習者に自身の敬語使用における人物の関係性理解への気づきを与える。

### 3.2 敬語種類峻別フェーズ

システムがモデル上に表示した人物間の関係性に着目して、「尊敬語」、「謙讓語」、「丁寧語」、「敬意なし」から適切な敬語種類を選択する課題に取り組むフェーズである(図2b)。

この活動において学習者には、自身が構築したモデル上に表示された人物間をつなぐ線分を意識し、それぞれの敬語機能の差異を考えさせる。

学習者が誤答した場合、誤り箇所を選択前の状態に戻し、再考、修正を促す。その際、1)敬語使用判断が正しいか、2)敬語種類を正しく峻別できているか、の順に足場掛けとしてのフィードバックを提示し、誤りを指摘する。これにより、人物の関係性と敬語の関わりの観点から、それぞれの敬語の機能について深い理解を促進する。

### 3.3 敬語表現文生成フェーズ

システムが表示する一文穴埋め問題において、敬語原理モデルに基づき適切な言葉を選択する課題に取り組むフェーズである(図2c)。

穴埋め箇所は複数あり、学習者がそれぞれの穴埋め箇所を選択する際にシステムは、どの人物間に注目して選ぶべきかを、モデル上の該当箇所を変色することで明示する。これにより、語彙変換において人物の関係性の把握と敬語種類の峻別の観点から理解を促し、最終的な敬語文の生成を支援する。

## 4. まとめと今後の課題

本研究では敬語理解に必要な原理を学ぶための学習活動を整理し、誤りに対する適応的なフィードバックを提示することで、敬語用法の原理的理解を促進する学習支援システムを開発した。

今後の課題としては、対象とする敬語において原理的な理解がシステムによって促されるのかを評価し、有用性を確かめたい。

### 参考文献

- (1) 文化審議会: “敬語の指針” (2007)
- (2) 萩野貞樹: “みなさんこれが敬語ですよ一図でよくわかる敬語のしくみ”, リオン社 (2002)